

片山潜，在露日本人共産主義者と 初期コミンテルン

山内 昭人

はじめに

- 1 朝鮮人と中国人による最初の試み
- 2 シベリアでの吉原太郎
- 3 訪露した田口運蔵と吉原との共同
- 4 日本人密偵容疑者たち

おわりに

はじめに

前稿（「片山潜，在米日本人社会主義団と初期コミンテルン」『大原社会問題研究所雑誌』544号，2004年3月）に引き続いて，本稿では，初期コミンテルンとその下部ないし関連組織の側から「東回り」の日本社会主義運動との接触の試みについて考察する。

本稿に先立ち私は，暫定稿「片山潜，在露日本人共産主義者と初期コミンテルン——点と線に関する覚書」を『初期コミンテルンと東アジアに関する歴史文献学的研究』（平成14-16年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書，研究代表者 石川禎浩，2005年4月，78-98頁）に載せたが，その際，4度目のロシア国立社会 - 政治史アルヒーフ（ルガスピ）史料調査のおり注文したマイクロフィルムが延着のため間に合わなかった。本稿は，そのマイクロフィルムも利用した増補改訂版である。

なお，同科研費報告書に私は，2節（「ソヴェト・ロシア外交とシベリア，東アジア」，「初期コミンテルンの東アジア組織構造の形成」）から成る「序章——初期コミンテルンと東アジア」（1-16頁）も載せ，それが本稿の背景的説明となっている。それに関する事項については，紙幅の関係で本稿では必要最小限の言及にとどめる。

1 朝鮮人と中国人による最初の試み

1919年3月26日に始まるコミンテルン執行委員会（ИККИ）会議の議事録をみていくと，半年以上もの間，東アジア関係が議題にのぼることはなかった。

ようやく1919年12月1日のИККИビューロー会議の第6議題に「東方問題について」がのぼり，

以下が決定された。特別協議会を劉紹周（沢栄）（中国）、ガイダルハン（ベルシア）、ナリマノフ（アゼルバイジャン）とГ.И. サファロフらを招待して開催すること。そこへ東方諸民族への全般的アピール草案および中国、日本、朝鮮、インド、トルコ、ベルシア諸民族への個別のアピール草案を提出することをЛ.М. カラハン（外務人民委員代理）へ委任することが（Российский государственный архив социально-политической истории（Москва），ф.495, оп.1, д.1, л.85（以下РГАСПИ, 495/1/1/85と略記））。

それは12月11日のИККИビューロー会議で実現し、上記のほか朴鎮淳（朝鮮）らが招待されたのだが、その招待は東方諸民族に向けてのコミンテルンの呼びかけを準備する担当者を決めるという作業が予定されていたからであった。第4議題「アピールとメッセージに関して」で、朴には朝鮮人に向けてのアピールに加えて、А.Н. ヴォズネSENSキー（外務人民委員部東方部長）とともに日本人に向けてのアピールの、そして劉には中国人に向けてのアピールの原案作成がそれぞれ委任された（РГАСПИ, 495/1/1/90-91; cf. 劉孝鐘「国民会とコミンテルン」『青丘学術論集』18集, 2001年3月, 200-201）。

続く第5議題「ИККИの部の構成に関して」で、「ИККИに附属して東方部とアメリカ部を形成する」ことが決定され、ここにアジアを統轄する中央機関として東方部（Восточный отдел ИККИ）がモスクワに設立され、М.П. パプロヴィチが部長を務めることになる。他方、東アジアの現地機関は、以下付記していくように、変遷を遂げていく。

ソヴェト・ロシア側からの日本への最初の働きかけは、目下史料で確かめられる限り、В.Д. ヴィレンスキー - シビリャコフがИККИへ提出した1920年9月1日付書簡にみられる。それは東アジア諸民族の中での外国人の活動（1919年9月～1920年8月）に関する報告であり、それによると、ヴィレンスキーは1920年5月、「コミンテルン東アジア書記局」（Восточноазиатский секретариат III Коминтерна）と命名された臨時のセンターを上海に組織し、自ら臨時ビューロー代表を務めることになった。そののち、すべての活動は書記局、その中の中国、朝鮮、日本の各セクションを通じて軌道に乗った。けれども、日本セクションはしばらくの間萌芽状態にあった、という（ВКП(б), Коминтерн и национально-революционное движение в Китае. Документы, Т.1（Москва, 1994）, 36-40; 山内「序章」3）。

続いて中国、朝鮮、日本の活動報告がなされ、日本セクションのために以下の活動案が練られていた。「1）日本社会主義者とのより緊密な関係を確立する」ことがめざされ、そのため「3）以下の可能性に注意を向けながら、日本における共産主義細胞の創造に向けて手段を講ずる。すなわち、а）在日朝鮮人、中国人学生の中に共産主義細胞を組織する、б）マルクス主義研究の必要性の宣伝を組織し、このために日本語での科学的マルクス主義の機関紙を創刊する。」続けて、「4）日本労働者の労働組合の中への活動強化の必要性に注意を払うこと。」最後に、「5）日本における働き手のために特別の養成所を上海に設立する」と。しかし、ヴィレンスキー自身が記したように、「日本における活動の困難さの故に、計画は一部しか遂行されなかった」（РГАСПИ, 495/154/2/3 [本史料は劉孝鐘氏より提供を受けた]; 上記の史料集では朝鮮と日本の両セクションについての活動報告は省かれている）。

遡及的ではない最初の史料としては、ヴィレンスキーが極東全権代表の肩書でモスクワの外務人

民委員部とオムスクのロシア共産党（ボ）中央委員会シベリア・ビューローへ宛てた1920年5月14日付電報がある。その中に具体性は乏しいけれども、彼がИ.Г. クシナリョフとП.М. ニキフォロフとともに極東ビューローを構成し、国外の活動としては「諜報員が組織され、中国と日本へ要員が派遣され、中国社会主義者との関係が結ばれた」とある（*Дальневосточная политика Советской России (1920-1922 гг.) Сборник документов Сибирского бюро ЦК РКП(б) и Сибирского революционного комитета*（Новосибирск, 1996）, 70）。

ここで両ビューローについて付記しておけば、1918年12月17日のロシア共産党（ボ）中央委員会ビューロー会議での決定により、シベリアにおける全活動の遂行のために中央委員会の中心部局を組織することになり、シベリア・ビューローがイルクーツクに創設された。その1年後コルチャーク軍が敗走し、（1919年11月から本拠をオムスクに移していた）シベリア・ビューローは、党中央委員会の指図を受けて「ザバイカルおよび極東の党活動のためにロシア共産党極東ビューローを分離する」ことを決定し、1920年3月3日に「極東ビューローの活動に関するシベリア・ビューローのテーゼ」を作成した。それによって、極東ビューロー（ダリー・ビューロー）の創設が決定され、そしてシベリア・ビューローの指揮の下、目前（4月6日）の極東共和国創建に備え、東方シベリア全領域の党およびバルチザン運動の統轄がめざされた。さらに、半年もたたぬ1920年8月13日にロシア共産党（ボ）中央委員会政治局によって承認された「極東共和国に関する小テーゼ」にもとづき、「ロシア共産党中央委員会は、中央から任命され、党中央委員会に直接従属する極東ビューローを通じて極東共和国の政治を指導する」こととなった。すなわち、極東共和国の「内政のすべての重要問題と例外なしにすべての外交問題が……中央との同意を得て決定される」のを確実にするため、極東ビューローはシベリア・ビューローの管轄からはずされ、党中央委員会に直属し、シベリア・ビューローと同格の機関となった。そのことは両ビューローの共同だけでなく、時として角逐をもたらすことにもなる（山内「序章」3-4, 7-8, 9-10）。

果たしてヴィレンスキーが関与した活動が日本へ向けてなにかの成果をみたであろうか。日本との接触については従来、日本側から当事者の回想および官憲史料をもとに追究されてきたが、以下、新たなアルヒーフ史料をもとにソヴェト・ロシア側からの追究がなされる（その追究が可能な限り果たされることと、そのソヴェト・ロシア側からの接触の試みへの日本側の対応の解明が求められる）。

ヴィレンスキー報告より少し前、在露日本人社会主義者吉原太郎が、次のようにコミンテルン第2回大会向けの文書の末尾で活動の意欲と要望を示していた。「我々は同志片山の援助を求め、そして彼にいく人かのよき日本人革命家をアメリカから我々の仕事を手伝いに來るために選ぶことを頼まなければならない」、「どうか英語と露語の両方で読み書きできる一人のよき共産主義者を我々に供給してくれるように」と（РГАСПИ, 5/3/672/1-3; 前稿第3章(1)参照）。

コミンテルン第2回大会に続く1920年9月1-8日にバクーで開かれた東洋諸民族大会に吉原は出席し、議長団の名誉団員に選ばれたのち、モスクワに戻り9月27日のИККИ会議に中国、朝鮮の同志とともに自らも参加して、極東における活動の問題を討議した。早くもこの時点でИККИは、シベリアの一都市で極東諸民族の大会を招集することが必要と認めていた（*Коммунистический Интернационал*, No.14, 6.XI.1920, 2947-2948; 村田陽一編訳『資料集 コミンテルンと日

本』第1巻（大月書店、1986）、14）。

その時もしくは直後の10月1日までにコミンテルン本部は、吉原をおそらく9月27日会議に同じく出席したであろう朴鎮淳と劉紹周とともに極東諸民族大会の組織委員会委員に任命し、そしてシベリアへ派遣する彼ら3名と協力して速やかに大会準備に入ることをИ.Н. スミルノフらシベリアの同志へ要請した。が、その時コミンテルン本部は、朴と劉の仲違い故に両者にはあまり期待せず、スミルノフに大いに期待した（*Дальневосточная политика*, 142）。当時、シベリアにおけるすべてのソヴェト権力はスミルノフの手に集中し、彼を通じてソヴェトの極東政策は遂行されていたと言いうるほどであった。彼はシベリア革命委員会議長であるとともに、党シベリア・ビューローと赤軍第5軍革命軍事評議会を指導していた（Cf. *ibid.*, 13）。

続く日本人との接触の試みは、韓国共産党中央委員会代表のロシア共産党（ボ）中央委員会極東ビューロー宛1920年10月22日付報告にある（РГАСПИ, 495/135/21/1, 1 о6, 2, 2 о6, 3 [本史料は劉孝鐘氏より提供を受けた]）。韓国共産党とは、上海に行った韓人社会党が当地にウラジヴォストークから派遣されてきていたГ.Н. ヴォイチンスキーらの意向を受けて1920年5月に改編されたもので、その中央委員会は李東輝、金立らから成っていた（劉孝鐘「林京錫『韓国社会主義の起源』ソウル、2003年」書評レジュメ、未公表）。

その朝鮮、中国に続く、「現在、日本は極東における第二のドイツである」で始まる日本の項の報告によると、「最も緊密な関係と相互の情報交換の確立のため、と同時に、日本帝国主義へ反対する統一戦線創設のために、韓国共産党は同志Ли-Чуншук（李春熟）を日本社会党の首領、同志 Шакай（堺）のもとへ派遣した」。そして、堺利彦とともに以下の3点の行動方針を作成した、とある。が、当該箇所の一部が破損していて正確を期しがたく、第3番目だけを記しておく、革命運動時に広汎な党宣伝の遂行のため在学している日本人と朝鮮人の統一的同盟を組織することであった。

ここに、1920年7月李春熟を派遣した組織自体の直接史料が初めて明らかとなった。李は朝鮮人留学生李増林と諮って堺利彦らと会い上海行を誘うが、結局、大杉栄が10月上旬上海へ渡航したことは、大杉の『日本脱出記』などでよく知られている。が、複数の官憲史料を含め細部に食い違いがあり、山泉進の最新の検討が参照に値する（山泉進「大杉栄、コミンテルンに遭遇す——（付）李増林聴取書・松本愛敬関係史料」『初期社会主義研究』15号、2002年12月、86-121）。

『日本脱出記』によれば、上海でM [李増林か] と再会した大杉はL [李東輝] のところに案内され、翌日以降ロシア人のT [タラソフの変名をもつヴォイチンスキー（Cf. 石川禎浩『中国共産党成立史』（岩波書店、2001）、137）] や、シナ人のC [陳独秀] や、朝鮮人のR [呂運亨] らと会議を重ねた。そこでは、「いつも僕とTとの議論で終った」。続くTの主張は伏せ字で読めず、そのあとに「シナの同志も朝鮮の同志もそれにはほぼ賛成していたようだった」。無政府主義者としての大杉は、「極東共産党同盟に加わることもできず、また国際共産党同盟の第三インタナショナルに加わることもできなかった」（大杉栄『自叙伝・日本脱出記』飛鳥井雅道校訂（岩波書店、1971）、291-293）。

この「極東共産党同盟」こそ、上記史料の「統一的同盟」と一部重なるであろう。さらに、ヴェレンスキーが「東アジア諸民族の中の革命運動を支援し、日本、中国、朝鮮の革命的組織と強固な

関係を確立すること」をめざして1920年5月上海に組織した上記の「コミンテルン東アジア書記局」，しかもそれはヴォイチンスキーの上海到着を前提としてはじめて機能しえたであろう組織（山内「序章」3）の構想とつながっていたであろう。

ヴィレンスキーはこの経験を踏まえ，モスクワに戻って1920年9月1日にИККИへコミンテルン東アジア書記局の組織案を提案した（山内「序章」6-7）。実は，もう一つの構想がその少し前，7月25日にコミンテルン第2回大会へ劉紹周，マーリン（H.J.F.M. スネーフリート），朴鎮淳によって提案されていたのであり，それは上海における極東の一ビューロー設立案であった（РГАСП II, 489/1/14/117-118; 山内「序章」11）。後述する吉原のいう「東洋共産党」組織案が，すでにこの時期二つのルートから構想され，模索されていたことになる。

上海の大杉に戻って，意見の一致をみなかったもののヴォイチンスキーから申し出られた資金提供に対して，大杉は条件（「細かいおせっかい」）の付く金は拒み，帰国間ぎわに「一般の運動の上でいる金」として提供された二千円を受け取った（大杉，294-295）。大杉がめざす無政府主義者と共産主義者の共同の可能性は，その資金をもとに翌21年1月29日に月刊から週刊に変えて再刊される『労働運動』でめざされることになるが，その不首尾に終わる結末もよく知られている。

韓国共産党中央委員会代表報告および先のヴィレンスキー報告にみられるように，吉原が未だシベリアに到着しない間，朝鮮人と中国人の活動家が上海を拠点に日本社会主義者との最初の接触を試みていたことになる。

その上，ИККИ自体が東アジア書記局や「東洋共産党」とかの前提となる構想を立てていた。コミンテルン第3回大会閉幕ひと月後の1920年9月初め頃，ИККИは「中国，日本および朝鮮の労働者と農民へ」というアピール草稿を作成した（РГАСП II, 495/1/24/59-61）。その中で，「アジアの政治状況は第3共産主義インタナショナル執行委員会に，革命的運動のふさわしい瞬間が到来したとの固い確信を与えている」との判断の下に，「東アジアにおける帝国主義……との革命的闘争のため，あらゆる立派な革命家，中国，日本，朝鮮の共産主義者へ共産党の一つの連盟へ結集すること」が提案され，そして「労働者ソヴェトの国際連盟に仕えなければならない三つの自由な社会主義共和国の将来のソヴェト連盟，その創設のために不可欠な条件である中国，日本および朝鮮共産党連盟（федерация Комм. Партий Китая, Японии и Кореи）万歳」など三つのスローガンで結ばれていた。

それに先立つ1920年7月半ば，ロシア共産党（ボ）中央委員会の枠内で東方諸民族の代表を集める仕事の進展を背景に，シベリア・ビューロー附属東方民族セクションが創設された（山内「序章」12-13）。1920年10月15日付とみなされる東方民族セクションによる，具体的にはH.K. ゴンチャロフ（シベリア・ビューローの東方活動全権代表）とH.G. ブルトマン（東方民族セクション議長）による，モスクワの党中央委員会，コミンテルンのジノヴィエフおよび国際労働組合評議会（プロフィンテルンの前身）のM.П. トムスキー宛の電報では，同セクションに日本部が以下のように組織されたことが報じられた（РГАСП II, 534/4/3/3-4）。「非合法的に自らの中央委員会をもつ日本社会主義の党の活動家との関係は確立された。日本兵士と労働者の中への強化された活動が行われている。宣伝ビラの小冊子類が出版されている。」この日本セクションの活動が本格化するのには，吉原の間もなくの到着を待ってであった。

ついでながら電報の後半では、「コミンテルンの〔極東の〕書記局が再組織化されなければならない」との次章で取り上げる問題が記されたあと、「同時に、中国、朝鮮、日本の革命的諸組織のために個別に中国で予め諸会議が招集されるであろう。それぞれにおいて、東方民族セクションの代表および極東の他の民族の最も著名な代表が来るであろう」とも記されていた。

また、東方民族セクションの1920年9月付文書によれば、ロシア共産党（ボ）イルクーツク県会議において、同セクション日本部からはКим-Шен-Чанが日本語で挨拶するであろう、と吉原到着前の日本部の担当者名が記されていた（РГАСПИ, 495/154/34/99）。

2 シベリアでの吉原太郎

吉原のシベリアでの最初の活動は、1920年11月7日に練られ、スミルノフと太郎の署名のある、シベリア・ビューローによるコミンテルン独自の書記局および同附属日本セクションの組織化計画によって目下跡づけられる（РГАСПИ, 17/84/78/20-21 об.; *Дальневосточная политика*, 147-151）。

その計画の前に記されていたことは、日本との間に使者が不断に往き来し、情報を与え、文献を渡しており、その関係は共産主義的ではないが、様々な社会主義的分子とのことである、と。そしてその計画によると、シベリア・ビューローのイニシャティヴで、コミンテルンは極東諸民族内での活動を直接指揮下におき、ヴェルフネウジンスクに独自の書記局を組織することを決定した。

この書記局の日本セクションは、吉原と日本への全技術的接触機関との間の伝達機構として役立たなければならず、技術的機関に1、2名の同志をおき、彼らを通じて日本セクションの指針を与え、彼らから間断のない情報を得ることとした。そして吉原の最初の任務は、日本語による文献印刷と日本への輸送の技術的機関の整備とし、その文献の印刷・輸送の機関の組織後はじめて、吉原の日本への出発が考えられるとした（ただし、出発に際してコミンテルンの同意は必要）。吉原の出発前に少人数でも共産主義グループを予め派遣し、最初の接触をはかり、それを通してさらに吉原が共産主義組織の創設について働くことができるようひとまず手はずが整えられた。

さらに同史料によれば、極東の拠点の中心であり、コミンテルンと直接連絡を取っているチタは、東方〔各国各地〕への伝達手段にとって不都合な状態のため、イルクーツクに印刷所が組織され、そこに当分吉原も留まっている。吉原はチタとは、2名の常連とだけ接触している。書記局の機関はチタで極東ビューローのA.A.ズナメンスキーの指揮下で活動しているが、しかしそれは吉原との直接の関係をもたず、彼とはもっぱらブルトマン（東方民族セクション議長）を通して接触している。日本との接触については、チタの中心的拠点がハルビン～ウラジヴォストーク経由とブラゴヴェシチェンスク～ハバロフスク～ウラジヴォストーク経由で準備し、さらにイルクーツクからウルガ、北京、上海のルートの可能性も探る。また、ハルビンから大連へのルートも考慮する必要がある、とある。

その上海ルートに関して、無署名で日付なしだが、中国へ発つ同志への「指令」（期限4カ月以内）においても、後半の第6、7、8（「太郎との関係確立」）項目をまとめて記した中に、貴金属の現金化、印刷機の獲得、太郎を通じて日本との関係確立が挙げられたうえで、上海への二つの予

定ルート，すなわちチタ～満州里～ハルビン～上海もしくはチタ～ブラゴヴェシチェンスク～ウラジヴォストーク～上海が示されていた（РГАСПИ，495/154/7/38-39 об.）。日本との接触にとって上海の重要性が浮かび上がる。

1920年11月13日，スミルノフはジノヴィエフ（ИККИ議長）宛書簡で，極東におけるコミンテルンの方針に沿ってのシベリア・ビューローの活動について報告した（*Дальневосточная политика*，155; cf. РГАСПИ，495/154/7/20-20 об.）。その中で，極東のためのコミンテルン書記局（チタ）の構成員に11名を据えることが提案された（山内「序章」13-14）。ここでは筆頭に挙げられていた吉原に関してだけ記しておく，彼は日本セクションを指導することが期待され，また5名の実務担当者の中に入り，もし正式の権限をもった幹部会が必要ならば，ズナメンスキー，朴鎮淳，劉紹周，吉原，ブルトマンから構成することが想定された。

同報告によると，東方民族セクションはすでに中国，朝鮮，モンゴル，それに日本とさえ接触していたが，同時期頃「コミンテルン（モスクワ）／国際関係部」へ宛てた日付なしの下書文書には，ヨリ具体的な報告が，次のようにあった（Государственный архив Новосибирской Области（Новосибирск），ф.П-1，оп2，д49，лл.11-11 об.（以下，ГАНУ，П-1/2/49/11-11 об.と略記）[ノヴォシビルスク州国立アルヒーフからの史料は，以下も含めてすべて劉孝鐘氏より提供を受けた]）。今日までの東方での活動は，シベリア・ビューローの東方民族セクションが指導した。日本においては，上海の同セクションの指導部によって，同セクションの支部が組織され，同支部は日本社会主義政党〔単数形であり，日本社会主義同盟（厳密には，その創立準備委員会）をさす可能性が高いが，確証は得られていない〕との関係を確立した。あなたがたに任命された同志吉原が，東方民族セクション日本支部の指揮を自らとると我々は思う，と。

吉原がこれから加わろうとする段階ですすでに支部が組織されたとは，誇張が含まれているように思えるが，関係確立の事実は既述の大杉の上海行の経緯からみてとれる。

吉原の足跡は，さらに関連史料によってたどられる。11月24日の東方民族セクション会議に，吉原はコミンテルン代表として出席している（РГАСПИ，495/154/7/35）。モスクワからやって来た吉原は，コミンテルン本部への報告者派遣の要請を伝え，そして東方民族セクション副議長М.Н. ブロンシチェインと同中国部長М.М. アブラムソンをモスクワへ派遣することが決定された。

続いて，Ф.И. ガボン（東方民族セクション副議長のちに議長，イルクーツク）からシベリア・ビューローのスミルノフ（オムスク）への，コミンテルン新書記局の協力者の全権委任に関する1920年11月29日付問い合わせの中には，こうある（*Дальневосточная политика*，167-168）。予定されている吉原の上海出発，日本セクションの仕事の段取り，そしてこれらに関する支出に関連して，いかなる全権をもってあなたによってグレイ（И.П. クラルク；1年後に訪日し「グレイ事件」を起こす）が派遣されたか，明らかにすることを吉原が求めている。グレイは吉原の代理に指名されたのか，それとも単に協力者が通訳にすぎないのか，と。

そして本文書の裏には，ゴンチャロフのメモが次のようにある。グレイと吉原との会談〔下記の電報によれば，ゴンチャロフのグレイを介しての太郎との会談〕で，吉原があちこち動くのを考慮して，吉原が不在の時日本セクションの全接触はコミンテルン書記局に所属するグレイに集中するという点で，グレイが吉原の代理を務めなければならないことが示された，と。

この裏書きの内容が、シベリア・ビューロー書記ゴンチャロフとシベリア革命委員会総務部長Л.А. ダンツィス（トムスク）からガボン（イルクーツク）へ12月6日付電報で返答として伝えられた（РГАСПИ, 495/154/26/82）。

先の11月13日にコミンテルン本部へ報告された書記局案は、12月4日にシベリア・ビューローによってロシア共産党（ボ）中央委員会へ組織計画案として報告された（*Дальневосточная политика*, 174-177; 山内「序章」14）。それについても、日本関係だけ記しておく。

イルクーツク（あるいは、極東ビューローの指示では、チタ）に極東のすべての実際の活動を指揮する書記局を置き、日本部は吉原の出発時にクラルク（グレイ）を後任にする。日本に関する報告によると、日本において労働（組合）運動や全般にわたる社会主義運動の分子から共産党を組織するための土台を手探りで見つけているとあり、日本においては自立した共産党の建設、全ブルジョワ前線への闘争を目標とし、金融独占支配の武力による打倒を準備することとなった。

吉原の足跡をさらにたどると、「幹部会書記補」ダヴィドヴィチ（イルクーツク）からシベリア・ビューロー（オムスク）への1920年12月9日受信電報によれば、こうある（ГАНО, П-1/1/35/27）。[イルクーツクに] やって来た吉原は、我々に「東方民族」セクションの責任ある活動家のモスクワへの出発に関するコミンテルンからのたつての頼みを伝えた。ブロンシチェインとアブラムソンの「モスクワへ向けて」出発の間、「繰り返し」吉原は主要な組織的仕事の実行と関係整備のため上海へ行くことを申し出た。

内容から同時期頃と推定されるブルトマン（チタ）宛の署名なし書簡によれば、こうある（ГАНО, П-1/2/30/29-29 об.）。同志吉原に本書簡を持たせてやる。数回の会談から私「イルクーツクの一員」は、吉原について非常に良い印象を得た。本物の革命家-共産主義者、ヨリ多くの意欲をもった活動家、事業に大いに献身的な同志である。同志スミルノフとの話で、日本部の活動案が作成された。その活動内容は、こうである。極東共和国領土内で（必要ならば、ロシア国内でも）文献・出版関係と組織的・プロパガンダの活動を組織する（もし吉原が欲するならば、彼にグループを組織させよ）。チタに中央機関、ブラゴヴェシチェンスクに支部、そしてイルクーツクに印刷所を同時に並行して組織する。吉原は、まずひと月の予定で印刷所設置の指揮をとるためイルクーツクに滞在し、その後、支部の最終的完成とそれへの指令のためブラゴヴェシチェンスクへ行く（支部の二つの目的は、チタからの活動が不可能な場合の予備的機関となることと、日本人と日本語を知っている朝鮮人の中での募集活動である）。この機関が組織されるであろう時、吉原はチタに戻り、あなたがたとともに連絡機関の組織化、文献・情報の普及および技術的・指導的活動家の幹部要員の補充を仕上げる。この時まで（おそらく1921年2月までに）あなたがたには日本とのしっかりした関係が確立されているであろう。第一に長崎地区において、鉱山労働者の中に、水兵を通じて。

さらに続いて、このようにして準備中の組織的活動を終え、吉原はあらゆる党組織と関係をつけ、それらを指導するため日本に行くことができる。戦前の価格で約10万ルーブリ [=約2,000ドル; cf. РГАСПИ, 495/154/26/69] の「貴金属類」を私は吉原に渡した。彼がそれらをウラジヴォストークか他所で換金することを手伝うように。吉原の日本行の準備のため、綿密かつ機密にあらゆる手段を取り、密偵が群がっているクラスノシチョーコフを吉原に会わせるべきではない。吉原に日本に

おける組織化の計画が与えられた。あなたがたは英語で彼と話せるだろうが、念のため彼にスミルノフが自分用の一通訳を与えた。

ブルトマン（チタ）からゴンチャロフ（オムスク）へ発された1920年12月11日受信の電報（写しがスミルノフへも送られた）には、「イルクーツクにおける吉原太郎の引き留めと上海における非合法の反日活動計画」が、次のように記された（ГАНО, П-1/2/30/41-41 об.; cf. *Дальневосточная политика*, 178）。吉原は上海へ即刻出発することを求め、コミンテルンに打電もした。が、ブルトマンは1, 2カ月留まることを吉原に勧めた。信頼できる同志を上海へ特別任務をもって出向かせ、当地にいる日本人をイルクーツクに呼び出し、アメリカ（片山）とも連絡をつけ、予め上海で吉原が必要とみなすことをすべて準備する。このあと、吉原の出発を無条件で考えることとした。

「ここでは吉原は孤立して住んでいる」と報じられてもいたように、コミンテルン中央および地方機関の期待を一身に背負った吉原本人の能力（加えて、彼には日本国内での運動の経験がなかった）および他の日本人活動家の不在は、運動の成否に関わる要因であったろう。

上記ブロンシチェインとアブラムソンがモスクワへ赴きИККИに提出した「東方民族セクションの組織化と活動について」の1920年12月21日付報告については、すでに詳しく紹介したが（山内「序章」9-10）、日本に関して次のようにある（*ВКП(б), Коминтерн... в Китае*, Т.1, 48-55）。東方民族セクションのウラジヴォストーク支部が実現し、そこで朝鮮共産主義者の組織化と統合に着手し、当地で朝鮮共産党極東委員会〔未詳〕の創設に尽力したアブラムソンとИ.К. ママエフは、間もなくハルビン支部を組織するため当地に向かった。そこで日本語印刷所を設け、沿海地方にいる日本占領軍に向けての小冊子の印刷をめざした。その時〔1920年春頃〕日本語に翻訳された小冊子は、『ポリシェヴィキについての真実（誰がそのような共産主義者か）』、『水についての物語』（E. ベラミー）、『何がそのような労働者の党か』であったという。

続いて、日本との接触を確立する試みは（日本語のできる活動家の不在のため、日本部は未だ設置されず）ウラジヴォストーク支部でなされた。そこから二人の朝鮮人が派遣され、9月に帰還予定であった〔が、連絡がなかった〕。同様の試みは、東方民族セクションの上海支部〔ヴォイチンスキー一行が担う〕でもなされ、そこからも東京へ二人の朝鮮人が派遣された（上海支部ヴォイチンスキーの東方民族セクション宛 8月17日付の最初で最後の報告によれば〔*ВКП(б), Коминтерн... в Китае*, Т.1, 30-33〕、うち一人が戻ってきて、大杉、堺、山川均の各合法雑誌刊行等について報告したあと、再び文献をもって送り返された）。日本部の組織化と日本での計画的活動は、〔上述したように〕吉原のイルクーツクへの到着をもって今、始まっている。

1920年12月23日、イルクーツク滞在の吉原自身からコミンテルン本部へ送った書簡の抜粋写しが残されており、その中にこうある（495/127/4/14-15）。日本でのシベリア出兵への反対世論、労働運動などの最新ニュースが伝えられた。労働者はどこでも不満を抱いており、共産主義プロパガンダが直ちに求められている。このため、私〔吉原〕は印刷機一式を必要とし、ウラジヴォストークへそれを依頼したが得られず、このことが私を上海へ行かせる。スミルノフの指図に従って、私は上海行の許可をコミンテルンへ求めるため手紙〔複数〕と電報を送った。1カ月間、返事を待っている。この間、コミンテルンから二つの電報を受け取ったが、了承したのかがわからない。私は

5,000ドルとはほぼ同額の銀を持って一老党員とともに出発しつつある。スミルノフの指図によるその換金を、老党員がチタでしてくれるだろう。そのうち1,000ドルは在米の片山に届くよう、シカゴのメアリ・マーシ宛に送らなければならない（前稿第5章参照）。残り4,000ドルを持って上海へ行き、また日本の代理人をそこへ行かせ始めなければならない。私は2カ月以内に戻ることを期しているが、その間、クラルク・グレイが支部の管理者となるだろう、と。

1921年に入って、1月5日のロシア共産党（ボ）中央委員会決定および1月15日のИККИ小ビユーロー会議決定により、東方民族セクションが解散・再組織化され、ИККИ極東書記局がイルクーツクに創設されることになった。コミンテルンの東方政策はやがてはИККИ東方部に統括されていくのだが、その第一歩は、ロシア共産党附属で当初実現した諸構造の統合・一本化をめざしてそれらをコミンテルン管轄下に移すことであった。このように組織の一本化と活動の限定・集中化をはかりながら極東書記局はスタートを切った（РГАСПИ, 495/154/93/1; 山内「序章」15）。

翌2月13日に極東書記局の最初の会議が開かれ、2月16日から外務人民委員部シベリア・ミッション（山内「序章」2）と東方民族セクションの職員が同書記局に移ることになり、日本セクション書記にはレドニコフ（А.И. Редников）が就き（РГАСПИ, 495/154/93/2-3, 495/154/93/4; 「露国ヨリ帰還ノ邦人共産黨員」小玉三郎の調書（1925年12月警視庁調）にある「レズニコフ」と同一人物とみなされ、ツァーリ時代の在東京ロシア大使館通訳生であった。荻野富士夫編『特高警察関係資料集成』第6巻（不二出版, 1991）, 188）, 彼には局長となったБ.З. Шумицキーと同額（6,160ルーブリ）の給料が支払われた（РГАСПИ, 495/154/93/26-28 об.）。この時期、吉原の不在から、彼は中国へ（あるいは、初めて日本へも）派遣されていたのであろう。以下、日本関係者だけみていくと、翻訳部に朝鮮語－日本語でБак-Хыуが、日本語－朝鮮語でКим-Тон-Ханが、いずれも2月16日から給料2,380ルーブリで着任し、前者に2月25日からПэг-Ун-Хакが加わっている（Ibid.）。また後者に5月31日からАн-Енが加わり、そして6月27日からЧеЗаре（Л. Чезаре）が給料6,160ルーブリで日本セクション・ロシア書記に就いた（РГАСПИ, 495/154/93/131, 495/154/93/136）。

かくして1921年7月1日までに日本セクションの陣容はそれなりに整い、レドニコフ（民族書記）、ЧеЗаре（ロシア書記）と2名の職員（Пак-ДинとКим-Хан）で構成された（РГАСПИ, 495/154/93/144-144 об.）。9月26日付指令第20号によれば、レドニコフが民族書記の職務を解かれ、その書記に出張中のノギ〔乃木＝吉原〕が目され、暫定的に職務は朝鮮セクションのダヴィドヴィチに期待された（РГАСПИ, 495/154/93/176）。同ロシア書記の方も、10月1日からゲルシェヴィチ（М.Н. Гершевич）に代わる（РГАСПИ, 495/154/93/178）。

日本セクションの活動内容については、以下の研究（ただし、典拠は示されず）がある。「スタッフの数人の日本語の専門家が、いろいろな文献や反戦ビラを訳した。1921年6月には中国から買った日本文字の印刷機が、イルクーツクに到着し、9月から印刷を始め、1921年末までに9点のパンフとビラが印刷された〔本稿第4章参照〕。1921年夏にはブラゴベシチェンスクにも日本文字の活版印刷所がつくられ、総部数4万4000部のビラ6種が印刷された」（ユーリー・ゲオルギエフ「ソビエト国家の誕生と日本の国際主義者たち——第一部“シベリア出兵”に反対して」『今日のソ連邦』21号, 1980年11月1日, 14）。

そのような活動実態の一端は、無署名の露語下書文書「業務第7号／コミンテルン極東書記局のまとまった情報／日本セクション」で知りうる。それは第Ⅵ項まであり（ただし、第Ⅳ項は3文字のみで、第Ⅴ項はない）、第Ⅰ項に1921年4月12日、第Ⅵ項に5月18日の日付がそれぞれあるので、その期間の情報とみられる（РГАСПИ, 495/127/7/1-2）。

文書全体の半分強を占める第Ⅰ項には、こうある。プハーリンの『綱領』[『共産主義者（ポリシェヴィキ）の綱領』]、『共産主義のABC』などの翻訳を除き、今日まで日本に関する実際の活動は行われなかった（現在、『共産主義のABC』の4つの章とプハーリンの『ロシア共産党綱領』の全訳が終えられている）。現在、接触は回復しつつあり、「乃木」が中国へ出発した。「乃木」は中国製の日本語印刷機を購入し運んで来ることと便覧的な性格の文献を入手する任務をもっている。

日本の活動のために翻訳スタッフとして書記局で活動していた3名の日本人が集められた。そして日本労働運動の事実にもとづく概要作成に着手した。日本への直接の活動は、中国共産主義組織との関係利用にもとづいて我々によって立案される。[1921年]1月中国に接触のため日本共産主義指導者Осоги [Osugi (大杉) であろうが、日付は上述のように1920年10月] がやって来て、細部について我々と合意に達した。彼と我々と一緒に作り上げた上海革命ビューロー（Шанхайревбюро）計画と活動方法は、近日中に乃木と一緒に書記局によって修正されるであろう。

その上海革命ビューローとは、ほぼ1年前当地にやって来たヴォイチンスキーが4名の中国人革命家とともに創った組織名であり、それは1920年7月から8月にかけて中国共産党結成への歩みを加速化するのに貢献した（石川, 129-134）。そして10月に、上述のようにヴォイチンスキーから大杉が話をもちかけられ、「合意に達した」わけではなかったのが、極東共産党同盟であった。その計画の検討が、担当者を代えて継続されようとしていた。

続いて第Ⅲ項を全訳すると、こうある（РГАСПИ, 495/127/7/2-2 о6.）。「『共産主義のABC』の翻訳は続いている。出発する同志へ、中国の活動を指導し、さらに日本社会主義者、総じて革命的グループ、個々の活動家と連絡をつける指示が与えられた。イルクーツクへ代表を派遣し、さらに朝鮮人共産主義者の現存グループを通じてしかるべき日本の組織を極東諸民族大会へ引き込む活動を行う可能性 [を探ることも]。」

実はこの箇所は、1921年4月24日にガボンがコミンテルン [極東] 全権代表代理の肩書でイルクーツクからモスクワのИККИ、同国際関係部および党中央委員会へ送った暗号電報の中の日本セクションの報告と全く重なり（РГАСПИ, 17/84/210/3 [本史料は劉孝鐘氏より提供を受けた]）、第Ⅲ項は4月24日前と推定されることになる。しかも、「出発する同志」とは乃木（=吉原）以外には見あたらず、吉原が極東諸民族大会への日本代表派遣工作の実際の開始を示す文書とこれは認められる。

さらに第Ⅵ項には、こうある（РГАСПИ, 495/127/7/2 о6.）。「遼東」半島関東州の日本人労働組合との接触が、しっかりと確立された。また、近日中イルクーツクに日本語活字セットが到着し（すでに満州国境を通り過ぎた）、第二の印刷機が据えられる、と。

このあたりの吉原の活動については、上記小玉調書の中に記述がある（荻野編, 第6巻, 154-157）。が、「一九二〇年十二月頃」「米国ヨリ一度内地ニ帰」ったのち中国経由で入露したとの記述

は、すでに推定したように吉原が1921年始め開始したであろう日本との往來を誤認したかで誤っており、それらの信憑性がどの程度のものか、さらに裏を取っていく必要がある。

なお、極東書記局の1921年6月15日および23日のオルグ・ビューロー会議の議事録をみると、語学コース受講者名が列記されており、英、独、仏、露語とともに日本語のコースが設けられていることがわかる。他の極東諸語と違い、日本語に通じた活動家に事欠いていた様子が間接的に窺える(PTACPII, 495/127/87/58, 75-75 06.)。

この時期、1921年4月24日に堺、山川、荒畑寒村、近藤栄蔵らの日本共産党暫定中央執行委員会によって「日本共産党宣言」および「日本共産党規約 [もしくは憲章]」が起草された(前稿第3章(5)参照)。それらを起草するに至る事の発端は、同月上海から派遣された朝鮮人李増林との接触だった(近藤栄蔵『コムンテルンの密使 日本共産党創生秘話』(文化評論社, 1949), 106-114)。上記日本セクションの記述と重ね合わせると、「朝鮮人共産主義者」を実際に利用しているし、吉原の工作が背後にあったものと推定される。

李増林については、以下の朝鮮総督府警務局の報告がある。李東輝の配下「金立ハ宣伝員李増林ヲ日本東京ニ遣ハシ社会主義者大杉栄、近藤栄蔵、高津正道、堺枯川等ト相往復シテ主義ノ伝播ニ努メ且彼等ノ速ニ上海ニ赴クヘキヲ勧誘スル所アリ大正九 [1920] 年十月以降大杉其ノ他同志ハ交々上海ニ密航シ李東輝及金立ニ面会シテ宣伝費ヲ入手シタル事実アリ」(『大正十一年 朝鮮治安状況』第2巻(ソウル:高麗書林, 1989), 370 [本史料は水野直樹氏より提供を受けた])。さらに「上海ニテ組織サレタル朝鮮共産党収支決算概要(一九二一年四月二十日現在)」には、「金一萬一千五百円也 日本共産党ニ渡シタル」とある(同上, 437-438)。1921年5月7-10日、上海に赴いた近藤が受け取った6,300円(近藤栄蔵陳述要領録取, 外務省外交史料館, 4.3.2.1-1 (12))は、日付からみてその「一萬一千五百円」に含まれないであろう。まだ「五六千円位ヒハ出スト云フ約束ヲシテ」(PTACPII, 521/1/78/69)、近藤は帰国し、周知のように5月13日夜、下関で逮捕された。

朴鎮淳が金立とともに巨額(400万ルーブリ)の活動資金を携えて上海に来たのは、1920年12月頃のことであり、翌21年初めにヴォイチンスキーが離れ、同年6月にマーリンが上陸するまでの間、当地でコムンテルン要員(ИККИの極東代表メンバー)として活動したのは、朴だった。到着時に韓国共産党が分裂していたため、朴は旧韓人社会党の李東輝らと接触し、同党中央委員会に資金を手渡した。同党は5月20-23日(「上海派」の)高麗共産党創立大会を迎えることになる。さらに、中国活動家に対して朴は、「正統」中国共産党につながる上海共産主義グループの活動が一時停滞していたおり、また諍いが絶えなかった劉紹周との共同は考えがたく(Cf. 山内「序章」9)、朝鮮人共産主義者の働きかけもあって成立した大同党という黄介民や姚作賓らの「共産党」と接した。上海在留の朝鮮人活動家こそ、コムンテルンと中国共産主義運動との仲介役を努めたのである。コムンテルン側にとってもまた、大同党はそれなりに対応するに値する組織と映っていた(石川, 142-162)。

近藤が上海で参加したのは、朴鎮淳を「座長」とするコムンテルンの会合であったのであり、まさに李東輝、金河球、金立も、黄介民、姚作賓もいた。韓、中、日の代表者で話し合われたのが、「韓国、中国、日本の共産団体の東洋総局」の組織化であったろう。韓国の最新の研究によれば(劉「林京錫『韓国社会主義の起源』」)、朝鮮人共産主義者は「日本および中国の共産主義者たちと

結合して東アジアの共産主義運動を統一的に指導することを目的に『東洋総局』という機関を組織しようとしていた。

近藤の方からは、朴へ上記「日本共産党宣言」，「日本共産党規約」が渡され、それらは朴を通してモスクワへ送達され、コミンテルン第3回大会閉幕間ぎわに届くことになる（次章）。両者はまた、極東書記局機関誌『極東の諸民族』4号（1921年10月15日）に露語訳で載る（*Народы Дальнего Востока*（Иркутск），No.4, 15.X.1921, 503-506, 507-510）。公表まで半年かかっているのには、朴および「上海派」に批判的な（E.g., РГАСПИ, 17/84/191/6）シュミヤツキー率いる極東書記局との良好でない関係が影響していたのかもしれない。ただし同号には、日本から直接送られた最初の原稿として、ナカガワ「日本における社会主義運動の概観」（横浜，9月10日付）も載る（*Народы Дальнего Востока*, No.4, 449-456; そこでは、売文社グループが山川らと高島素之〔「島」を「田」と読み誤ったかで「タカダ」と記された〕らの両陣営に分かれ、後者が国家社会主義を標榜したことなどの近況が概観されていた）。さらに続く5号には、5月初め頃作成された「ワシントン〔会議〕と日本プロレタリアート——日本共産党〔暫定〕中央〔執行〕委員会から日本の労働者への呼びかけ」も載っている（*Ibid.*, No.5, 10.XI.1921, 655-660），この1921年10-11月時点で日本セクションによる日本との接触ルートが確立しはじめたように見える。

他方、1921年6月17日にチタからコミンテルン本部のジノヴィエフへ送られた朴による暗号化された電報の解読文写しが残っており、本文を全訳しておく。「日本および朝鮮における共産党〔両〕創立大会は終わった。我々にとってやむをえない事情で、我々は前もって〔コミンテルン〕第3回大会招集について知ることができなかった。極東問題を我々は、日本および朝鮮の派遣代表のモスクワ到着後解決することを願う。彼らは8月初めに到着するだろう。第3回大会は日本、朝鮮〔高麗〕共産党を歓迎する。日本から堺が」（РГАСПИ, 495/154/83/9）。ここで途切れているのだが、日本からの代表派遣は実現せず、コミンテルン第3回大会へは田口運蔵と吉原が出席することになる。また、朴と李は姚を同道して出発したが、途中コロンボで足留めをくらい、モスクワに到着した時すでに大会は終わっていた（Cf. 水野直樹「コミンテルンと朝鮮——各大会の朝鮮代表の検討を中心に——」『朝鮮民族運動史研究』1号, 1984年, 84）。

3 訪露した田口運蔵と吉原との共同

コミンテルン第3回大会への在米日本人社会主義団からの派遣代表田口は、1921年5月12日レヴァルに入港し、同月末ついにモスクワに到着した（前稿第3章(1)参照）。訪露直後、田口は6月9日にM.A. トリリッセル（ИККИ東方部）へ宛てて日本の自由主義，社会主義，労働組合の各運動を丘辺杏（在ニューヨーク日米週報社社員）用箋の原稿用紙30枚で報告した（РГАСПИ, 495/127/93/16-46）。

同じ頃、田口からトリリッセルへ宛てた露訳書簡には、両者で話し合ったことが次のように書き留められていた（РГАСПИ, 495/127/6/19-20）。

- 1）田口はアメリカからの日本人同志を、シベリアでの共産主義活動のため、あるいはメキシコでのその準備のために参加させることを考えている。片山に伝達するため、ニューヨークの

[パンアメリカン・] エイジェンシーあるいは日本共産主義者グループ書記の石垣栄太郎の住所へ手紙を出すべきである。

- 2) もしもコミンテルンが田口に日本へ行くように決定するならば、指令を与えることを願う。もしもシベリアへ派遣されなければならないのならば、より速い指示を願う。
- 3) [田口がアメリカから持ってきた依頼の一つであるのだが] 日本における共産党の形成を考慮して、日本人共産主義グループはアメリカで日本のための雑誌や文献を出し、またアメリカとハワイに日本人間の関係を確立する（それらを通して日本へ文献を送るために）。このため、コミンテルンの援助を願う。

同じく、田口がトリリッセルへ「本日朝、我々の同志から受け取った」書簡の中身を次のように紹介した露訳書簡がある（РГАСПИ, 495/127/6/22）。

- 1) [1921年] 4月末に日本共産党が組織された。
- 2) この党の報告と全権委任状が在米日本人共産主義グループを通じてモスクワの田口へ送られるであろう。
- 3) 党はコミンテルンに（党の最も行動的分子であり、未だアメリカにおいて非常に不自由に活動している）片山グループをシベリアへ移す手段を講ずることを依頼する。

「本日朝」とは、1921年6月22日コミンテルン第3回大会第1回会議において田口が「[在米]日本人共産主義者団を代表して」挨拶した際には共産党結成が告げられなかった（村田編訳, 第1巻, 15）、それ以降であり、下記のように7月9、10日頃である。

同大会の6月24日の第4回会議では、ジノヴィエフがИККИ活動報告の中で、次のように日本に言及した。「われわれは、日本との連絡をぜひとも改善しなければならない。……そこには、指導者なしに、もっぱら労働者によって自然発生的に組織された一連の労働組合が存在する。それらの労働組合は、共産主義インタナショナルに大きな共感をよせているが、残念なことに、日本との連絡はたいへん悪い」（村田編訳, 第1巻, 15-16）。

当時の朝鮮、中国、モンゴルとの連絡に比べて、「日本との連絡はたいへん悪」かったというのがコミンテルン本部の判断であった。まだまだ実を結ぶには至らないその「点と線」の接触ルートは、新たに田口を迎え、吉原と共同して模索される。

田口のコミンテルン第3回大会代表委任状については前稿（第3章(1)）で紹介済みだが、実は、吉原の代表委任状は大会関係文書の中には見出されない。両者が大会広報部のために連署した肩書は「日本共産主義グループ代表」であったが（РГАСПИ, 490/1/32/22）、大会代表者リストや議事録では、田口が合州国の日本人共産主義グループ、吉原が日本共産党の各代表であるような表記が概してなされ、違いをみせている（E.g., РГАСПИ, 490/1/17/19 об., 20, 26 об.; 490/1/182/7; 490/1/196/2-3; 490/1/201/20）。吉原は大会最終日、7月12日の第23回会議で討論演説をし、冒頭、上記の日本共産党の創設を次のように伝えた。「同志諸君、私はまさに日本で組織されたばかりの共産党からの革命的挨拶を諸君に伝える。これらの決議が、規約、宣言とともに二、三日前に受け取られた」（РГАСПИ, 490/1/138/38-42, cf. 490/1/17/19 об., 2/1/19748/1; 村田編訳, 第1巻, 18）。けれども、そこでは彼の代表権への言及はなかった。

いずれからの代表委任状も残されていない吉原に審議権のみの代表権が与えられた背景に、彼と

レーニンとの会談があったのではないかと今のところ私は推定している。すなわち、残されたレーニンのメモ書きによると、1921年7月にレーニンは、吉原が「モスクワへ」いつ来るかが明らかになるや、彼と面会する手はずを整えていた（РГАСПИ，2/1/19748/1）。そのおそらく実現したであろう面会によって、もしくはそれを経て、吉原によるコミンテルン第2回大会へ向けての報告書作成（前稿第3章(1)）と続くバクーでの東洋諸民族大会出席の実績もあって、正式の手続きを経たとはみなしがたい吉原の代表権が認められたのではなかろうか。

その非公式承認であろうことの傍証として、ほぼ同時期にモスクワで開催されていたプロフィンテルン創立大会への吉原による代表権申請書がある（РГАСПИ，534/1/4/225）。以下が、その英文の全訳である。「コミンテルン第3回大会への日本プロレタリアートの代表が、赤色労働組合大会での審議権を申し込む。日本、東京のヨシハラ・タロウ／信任状第65号 受領／タロウ，ヨシハラ」。それは吉原自らが紙片に手書きしただけのもので、他の署名も印もないままプロフィンテルン創立大会関係ファイルに残されている。同創立大会の代表者リスト二種には吉原は載っていないが（РГАСПИ，534/1/4/1-5，534/1/4/6-14），『大会通報』によれば、7月18日の第16回会議での資格審査委員会報告において審議権をもった一代表権が日本へ割り当てられたとあり（*Бюллетень первого международного конгресса революционных профессиональных и производственных союзов*（Москва），No.14，19.VII.1921，1-2），それが吉原であろうから、その程度の紙片で認められたことになる。

コミンテルン第3回大会に戻って、吉原のもう一つの活動が確認できる。それは中国代表権をめぐる内紛に関してであり、江亢虎の中国社会党を代表しての代表権に反対するИККИ宛陳情書に、吉原は中国代表（張太雷）、朝鮮代表（署名は判読困難だが、南万春、徐天民、趙勲の3代表〔РГАСПИ，490/1/32/23〕のいずれにも読めそうにない）とともに日本代表として連署した（РГАСПИ，495/154/81/11〔本史料は石川禎浩氏より提供を受けた〕）。たとい事情に疎い吉原だとしても、極東書記局のシュミヤツキーの助力によって中国代表となった張太雷からの要請に応ずるのは当然であつたらう（Cf. 石川禎浩「初期コミンテルン大会の中国代表（1919-1922年）」、森時彦編『中国近代化の動態構造』（京都大学人文科学研究所，2004），68-79）。

また、同時期にモスクワで共産主義青年インタナショナル（通称、キム）第2回大会も開催されたのだが、開会に先立つ1921年7月5日、コミンテルンおよびキムの執行委員会関係者と朝鮮、日本、中国青年代表とで協議会がもたれ、前者4名（うちシュミヤツキーが議長を務める）と朝鮮から趙と南、日本から田口と吉原、そして中国から1名（判読困難だが、おそらく兪秀松）の計9名が出席した議事録の1枚目だけが残されている（РГАСПИ，533/8/71/3）。議題は「キム極東書記局に関する組織的狀態」と「極東諸国における青年の中への活動に関する狀態」の二つであり、前者の草案が決定され、そこにはキム極東書記局を通じてキム執行委員会が極東諸国における全活動を遂行することが規定されていた。その11項目から成る草案全文は別に残っており（РГАСПИ，533/8/71/6-7），その最終項に「キムの極東活動への融資はコミンテルン極東書記局によって行われる」とあるように、またスタッフを相互に兼任させながら、コミンテルン極東書記局のカーボン・コピーのごとく、キム極東書記局もまた極東での活動開始の態勢を整えつつあった。

1921年8月26日のИККИ小ビューロー会議において、「11月11日、イルクーツクに、ワシントン会議で審議されるのと同じ問題について極東〔原文では、東方〕諸民族の会議を招集する。会議の招集はトリリッセル、シュミヤツキーの諸同志に委託される」ことになった（村田編訳、第1巻、21; cf. РГАСПИ, 495/154/74/3; ВКП(б), Коминтерн... в Китае, Т.1, 63)。これに対して、ロシア共産党(ボ)中央委員会政治局は9月14日の会議で、「イルクーツクでのコミンテルンの協議会開催に原則的に反対しない」との表現で承認した(Политбюро ЦК РКП(б)-ВКП(б) и Коминтерн. 1919-1943 (Москва, 2004), 99)。

シュミヤツキーは、モスクワでの会議準備のため極東書記局の任を解かれることになった(РГАСПИ, 495/154/74/5-6)。関連して、ワシントン会議の結果に関する議案起草のためラデクとともに委任されることになった片山に対して、11月より早くモスクワに来るよう、正式に招請することになった(РГАСПИ, 495/154/74/5-6; *Die Tätigkeit der Exekutive und des Präsidium des E.K. der Kommunistischen Internationale vom 13. Juli 1921 bis 1. Februar 1922* (Petrograd, 1922), 141-144)。

また、日本との接触に関して、「その活動地域内に日本人労働者が居住しているすべての党にたいして、それらの労働者の仲介で日本とのできるだけ密接な接触を打ち立てるよう提案することを、〔極東〕書記局に委託する」ことになった。後者の件については、9月14日のИККИ幹部会会議で、日本との連絡の樹立のために書記局に対し、同地の労働運動との情報上および組織上の連絡をつけるために特別な措置をとることが委託された(村田編訳、第1巻、21)。

コミンテルン第3回大会後、吉原はイルクーツクに戻り、9月3日にモスクワ滞在中のW.D. ハイウッドに訪露後初めての手紙を出している(РГАСПИ, 515/1/4299/57-58)。それは運動に関する内容に乏しいものであったが、それによると、ツァーリズム時代にカレッジだった教師用住居に我々は住んでいる。市街地からいくらか離れているこれら二つの建物は日本人だけに占められており、田口も「目下私と一緒に滞在している」(Cf. 田口運蔵『赤い広場を横ぎる』(大衆公論社, 1930), 272-311)。返信の宛名は「同志乃木／イルクーツク、コミンテルン」としてもらいたい。国境に近い故に私はその名を使っている、とある。

なお、(上記田口のトリリッセル宛書簡の中で話題にのぼっていた)田口のシベリア経由での帰国と佐田(猪俣津南雄)のアメリカからの帰国とともに1921年10月末に合わせようとの計画があったこと、および佐々木(鈴木茂三郎)らが東回りでアメリカからモスクワへ赴くのととは逆の西回りで佐田が日本に戻り、シベリアでの活動との共同を一任され、佐田自身が中国へ渡る計画もあったことについては、前稿(第4章(2))で取り上げた。

1921年秋、大杉、近藤に次ぐ第三の使者として、先の5月の朴の近藤への約束により高尾平兵衛が上海に赴き、朴の友人より5千円程度受け取って帰った。

官憲機密文書によれば、「共産党極東大会ニ日本労働者代表ヲ出席セシメタル件ニ関シ……吉田一、和田軌一郎ノ兩名ハ入露ノ希望アリ……十月中旬二人ニ近藤栄蔵ヨリ旅費ヲ受領シテ上海ニ向ケ(当時上海ヲ中心トシテ日本、支那、朝鮮人集合シ居タリ)相携ヘテ東京ヲ出発セリ高尾ハ東京ニ在ルコト約一週間(……)ニシテ十月二十二、三日頃旅費トシテ近藤栄蔵ヨリ百円並高尾ノ所持金約百円ヲ携帯シテ東京ヲ出発シ大阪ニ立寄り下関ヨリ釜山上陸朝鮮經由北京ニ赴キタルガ予テ喋

合セタル入露ノ紹介者タルヘキ目的ノ露国人ニ会见スルコトヲ得ズ（……）為メニ北京ニ在ルコト約一週間ニシテ奉天ヨリ朝鮮ヲ經由シテ十一月二十日頃東京ニ帰着セリ」とある（在上海総領事館木下義介内務事務官の内務省警保局長宛1922年10月15日付機密文書，外交史料館，4.3.2.1-1（14））。さらに続けて，その手違いは「間接ノ原因」で，高尾の「志望」は「一，従来彼ノ信奉セル『アナキズム』ニ依リテハ到底所期ノ社会運動ノ目的ヲ達成スル能ハサルヲ思ヒ『コンムニズム』ニヨリテ戦線一致ニヨル卑近ナル社会運動ニヨリテ現実ニ社会改造ヲ実現スヘキヲ思ヒ極端ナル『アナキスト』タル吉田等ノ東京ニ在ラサルヲ利用シテ社会運動ニ新生面招カムトスルコト」など三点であった，と。

上海ではなく北京行であったことは，真偽も含めて気になるところだが，同文書によると，「九月下旬東京ヲ出発シ八幡市並ニ長崎市（……）ニ約二週間滞在シテ十月中旬一応東京ニ帰来セル」ともある。八幡，長崎滞在は上海往復には十分な期間であった。少しあとの1922年5月頃吉原（チタ）の片山（モスクワ）宛書簡には，高尾は「九月下旬上海ニ向ケテ行タ」，「此ノ際ニ自分ハ高尾氏トハ近藤（E.K.）氏ノ照会ヲ始メテ知り会ニナツタ訳ダ」とある（PГАСИИ，521/1/78/69）。通説の10月行ではなく9月行となれば，張太雷の訪日前ということになり，さらに検証が求められる。

その張太雷が上海から密かに来日したのは，1921年10月初め頃であった（同月12日頃離日）。張は「在上海露国過激派員S君の使命を帯びて」留学中の施存統を訪問し，施の仲介で堺，近藤と会い，極東諸民族大会への代表派遣を要請した。結果，6名にのぼる日本からの派遣代表が，11月11日に開催が当初予定されていたイルクーツクへ向かって出発することになる。「S君」とはスネーフリート（＝マーリン）と推定され，まさしくИККИ在外エイジェント，スネーフリートが張を派遣したのである。のちに1922年7月11日のИККИ会議でスネーフリートは，次のように報告した。「我々が一中国人同志〔張太雷〕を東方諸民族大会の準備のために派遣することができ，また同志太郎が日本へ向けて発つためにイルクーツクから来る時点まで，我々は日本の同志といかなる関係ももったことはなかった。……ひとたび日本人との接触が確立されたあと，我々は定期的に関係を維持してきている。日本の同志は隔週毎に急使を上海へ派遣した」（Archief H. Sneevliet, Inv. nr. 225, Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam; T. Saich, *The Origins of the First United Front in China: The Role of Sneevliet (alias Maring)*, Part 1 (Leiden, 1991), 295; cf. 山内昭人「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル（Ⅶ）——第Ⅵ篇のための補論——」『宮崎大学教育学部紀要』（社会科学），75号，1993年11月，11-12）。石川禎浩が指摘しているように，マーリンによる「張の日本派遣はコミンテルンと日本共産主義運動との接触の上で，重要な節目となった」と言えよう（マーリンの指令が陳独秀に諮らぬままの独断であったらしいことの詳細も含めて，以下を参照。石川，330-333，485-488）。

上記吉原の片山宛書簡の冒頭は，こうだった。「自分ガ昨年〔1921年〕日本ニ連絡ヲ作ル為ニ上海ヨリ派遣セラレタ当時ハ日本ノ無政府主義者ト共産黨員ノ間ニハ従来ノ隋弊ヲ一掃シテ共ニ社会革命ニ向ケ協同的行動ヲ取ル事ノ最モ賢明ナル方法デアルト云フ事ハ両者ノ間ニ痛切ニ認メラレテ居タノデアアルノ無政府主義者トシテ知ラレタル『労働者』同人高尾平兵衛氏ハ党ノ幹部ノ一人デアツタ E.K.事近藤榮造君ト了解ガ在ツテ此ノ兩人ノ間ニハ共産党ト無政府主義者団体ノ合同ニ尽力シテ居タ」。

「共産党ト無政府主義者団体ノ合同」という大同団結がめざされていたのであり、続けて、「当時日本デハ共産党ト無政府主義者トノ間ニ理論的ノ争鬪モ過ギテ兩者共ニ第三インターナショナルニ加盟スル事ガ最モ其ノ意ヲ得タモノトセラレテ居タニ拘ラズ上海ノ第三イ〔ン〕ター支部ト連絡ヲ作ル事ニハ逆テ居タ」。

その理由として吉原が挙げているのは、上海拠点機能が機能しなかったことである。朴鎮淳らによって自分たちがモスクワの正派代表者であり、B.A. ニコリスキー、マーリンらはイルクーツクの代表にすぎないと言われ、また「イルクツクノ東洋局〔極東書記局〕ハ露人ノ専断的行為ニヨリテノミ事務ハ処理セラレ」た故に「日支韓ノ同志ニヨリテ東洋共産党ヲ組織ナシテ上海ニ本部ヲ置キ彼ノ上海インターナショナル支部ノ手ヲ経ズシテ直ニモスクワ」と連絡を取る考えがあり、いずれが正当な連絡機関であるかの選択に迷った、とある（РГАСПИ, 521/1/78/69-70）。

これによって、朝鮮人「イルクーツク派」と「上海派」との対立、その背後のシベリア・ビューローと極東ビューローとの対立の余波を、日本人吉原らも大いに受けたことがわかる。「イルクーツク派」を支援するシベリア・ビューローとの共同からシベリアでの活動を始めた吉原にとって、朴ら「上海派」との共同には円滑に進まない面があったろう。また、吉原には理解されていなかったが、マーリンはイルクーツクの極東書記局とは関係せず、上述のように、むしろ朴、劉と3人で上海に極東の一ビューロー設置をコミンテルン第2回大会に提案したことが事の発端で、マーリンの中国行はИККИ在外エイジェントとしてであった。

ここでも、少し前の「極東共産党同盟」に通ずる試みが継続されていたことがわかる。吉原は「東洋共産党」計画へ積極的に関与できなかったようだが、少なくとも朴は熱心だったようで、1920年末時点で彼はコミンテルン本部に対して、「極東秘書部〔極東書記局〕に対してコミンテルン全権委員〔=朴〕と東洋共産党がどのような関係をもつべきか」を問い合わせたという（劉「林京錫『韓国社会主義の起源』」）。この計画は朴の1921年6月モスクワへ向けての出発、さらにはコミンテルンの表舞台からの後退と同じ運命をたどったのであろうか、その追究は他日を期したい。

1921年も過ぎようとしていた12月24日付でИККИ国際関係部チタ駐在員（Шадхан）がおそらくモスクワ本部へ送ったであろう暗号電報には、乃木と田口への言及があり、内容が読み取りにくいけれどもその一節に、「日本共産党はあなたがたに革命的挨拶と乃木のより大きな成功への希望を送る」とある（РГАСПИ, 495/154/139/216）。

これは日本国内から吉原へ期待を表明した最初の文書かもしれない。「立派な機関ができるまでの上海-日本の往復はほとんど吉原がやったと思う」との高瀬清の証言は、従来額面どおりに受け取られることはなかったけれども、「吉原はひじょうに重要な働きをしてい」く（同志社大学人文科学研究所編『近藤栄蔵自伝』（ひえい書房、1970）、474）。また、その期待は具体的に、1921年秋から冬にかけて極東諸民族大会への日本代表がシベリアの地に入るために払った吉原らの努力に寄せられていたのかもしれない。ここから日本との接触の「点と線」はより太くなっていく。

4 日本人密偵容疑者たち

その太くなりつつあった線上に、富永宗四郎という日本人が登場する。コミンテルン文庫日本共

産党ファイルには，“S. Tominaga”による1921年9月24日付英文覚書が残されている（РГАСПИ，495/127/6/12-14）。

それによると，富永は日本社会主義同盟（J.S.U.）からロシア共産党との間の時宜を得た関係を築くためこの4月に日本から派遣された最初の使者であった，と自己申告した。続けていうには，J.S.U.のキャプテン堺，山川，大庭柯公，荒畑らは「共産主義」に傾き，ロシア共産党と手に手を取って積極的に前進したいとすでに思っていたが，「上海」を通してしか関係をもってきていない。同志山川は“T. Yoshiwara”〔吉原本人の署名“Yoshihara”とは異なる〕と呼ばれる若い日本人共産主義者が長くアメリカに滞在していて，昨年太平洋を越えて〔上述の小玉調査同様，時もルートも誤っている〕ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国（P.C.Φ.C.P.）に行ったことを知っている。旅の途次，私は山川から，それによって吉原から便宜をはかってもらえるであろう2通の書簡を受け取った。しかし不幸にも，私はハルビンで脚にけがをし，多くの日時を費やした。その間，J.S.U.は解散させられ，わずかな熱心なメンバーで「日本共産党」（J.C.P.）と呼ばれる新しい秘密の党を組織することが試みられた。そこで私の登録をJ.S.U.の秘密メンバーからJ.C.P.へと変更した，とある。派遣の真偽もさることながら，果たして富永が満州で組織変遷を知りえ，さらにメンバー登録変更をしえたとは考えがたい。

引用を続けよう。P.C.Φ.C.P.とJ.C.P.とのよき関係とは何か？それが同志吉原と相談しなければならないままにその問題である。今，同志大庭（J.C.P.のキャプテンの一人であり，日本人スタッフの中で知れ渡った編集者である）が〔9月22日以来，西シベリアより（РГАСПИ，495/127/26/38）〕来ている。それで私はよき関係が深く築かれるであろうことを期待している。けれども，私の特別な希望は，P.C.Φ.C.P.から十分な物質的な援助〔資金か〕をJ.C.P.に送ることである。今や私の名前は日本官憲のブラック・リストの最初の行に書かれているであろうから，別の安全な方法によってそれがなされることが望ましい。もしもあなたがたが私を許すならば，長くP.C.Φ.C.P.に留まることがふさわしい（革命の好機が日本に訪れるまで）。私の出来る仕事は，運動においては日本官憲下では不可能な多くのパンフレットか宣伝物を刊行すること……であり，研究においては「共産党」や「赤軍」のシステムをよく学ぶこと……であり，また，日本での職業である獣医の手伝いも可能である。

その職業に関連して，富永は1887年に生まれ，同志社専門学校卒であることなどを記した1920年7月付露文履歴書も提出していた（РГАСПИ，495/127/6/1）。

下記のように全く根も葉もない話ではないのだが，このかなりいかがわしい文面からして当然のように，後日スパイの嫌疑が富永にかかることになる。一例を挙げれば，ロシア共産党プリモールスク州ビューローからИККИ極東部長ヴォイチンスキーへの1922年11月25日付報告には，次のようにある。ドミナガという日本人がイルクーツクのコミンテルン極東書記局から去年受け取った委任状をもって現れた。去年ドミナガはクボダ〔下記〕と一緒にロシアに来たと聞いているが，クボダは伝えられたところによると，日本のスパイの嫌疑で牢獄にいる。ドミナガは日本のスパイとは呼べないが，にもかかわらず彼についてはいかなる推薦も与えることができない。それ故，ИККИ Ⅱ附属の日本セクションへ彼について照会するよう提案する，と（РГАСПИ，495/127/26/56，495/154/135/143）。

富永のような「一攫千金ヲ夢見」で大陸に渡り、「一時日本軍ノ通訳ヲ勤メ」（阿部亀彦広島県知事の水野錬太郎内務大臣ほか宛1923年2月10日付機密文書，外交史料館，4.3.2.1-1（15）），一方的に接近して来た日本人とも初期コミンテルンは時として関わらざるをえなかった。

その富永のもう一つの相貌を，官憲史料によってみておこう。1921年「三月露領浦塩斯徳へ渡航ノ目的ヲ以テ旅券下附方出願セシモ不許可トナリ……四月中満州ニ渡航……更ニ北上ハルピンニ赴ケルモノノ如ク……近藤栄蔵一味ノ者ニ宛テ左記ノ秘密通信ヲ為シ来レル」。その6月29日付封書は，輸出入業“SHINWA CO.”〔下記〕の封筒を用い，「宮田政吉」より「東京市 丸の内／東京海上ビルデインク／瑞典太平洋商会内／岩壁保様」へ差し出され，内封筒の表に「松本愛敬様／親展」とあった。松本は「目下当庁ニ於テ取調中ノ過激思想宣伝容疑者」であり（前稿第3章（5）），「差出人ハ近藤栄蔵カ上海ニ渡航ノ際堺利彦ノ言ニヨリ立寄りタリト云フ京都市上京区大宮通今出川下ル薬師町二二八富永宗四郎（神戸，新和洋行員ナリシモノ）」と推断された。ハルピンにて西野六郎の偽名で富永によって書かれた文面によると，「小生の商売」である①浦汐の滞貨を買ふ事，②珍田商会〔チタの極東共和国政府〕との取引，③東部西伯利亚利権交渉も「すべて望少く相成」ったとのことである（内務省警保局長の外務省通商局長宛1921年7月22日付文書，外交史料館，4.3.2.1-1（13）；特高秘乙第583号，1921年7月9日付，同上）。

果たしてかかる仕事に近藤らが関与していたであろうか。少なくとも富永自身はその関係を吹聴したらしく，久保田（下記）の調書にも次のようにあった。「富永宗四郎モ亦山川堺等ノ証明書ヲ携ヘ日本共産党員ガ運動資金調達ノ為『チタ』政府ト交渉シ浦塩ニ於ケル滞貨ノ払下又ハ西伯利ニ於ケル利権ヲ獲得シ」云々と（白男川讓介福井県知事の水野内務大臣，内田康哉外務大臣ほか宛1923年8月11日付機密文書，外交史料館，4.3.2.1-1（15））。上記覚書と内容において接点のみえないその仕事は，あくまで富永が考えたものであろうけれども，松本および近藤とのつながりは事実無根とは言いがたいように思われる。近藤自身，下関警察署での取調べの中で，「京都ノ富永ニハ上海ノ事情聴キ取りノ為メ立チ寄りタルモノナルモ之レニ出会シ得ズ」と語り，立寄自体を認めている（中川望山山口県知事の内田外務大臣宛1921年6月11日付文書，外交史料館，4.3.2.1-1（12））。

上記覚書においても明らかのように富永が過大気味に評価していた大庭とともに，二人は1921年10月3日にコミンテルン書記局に宛てて，次のように書き送った（РГАЦИИ，495/127/6/21）。我々是我々のポジションを明確に知ることなしにここにいることは困難であるとわかりつつある。我々是我々の信任状を持って来れなかったので，我々をヨーロッパ経由で日本へ送り出すことをあなたがたに懇請する。しかし，もしもあなたがたが我々にある仕事を与えるならば，我々はここにとどまる用意がある，と。ここには，大庭のスパイ容疑による処刑の伏線がみえとられる。

二人については，入露直後に野中誠之が執筆した「入露事情と経過」に，次のようにある（РГАЦИИ，495/127/6/2-8）。1921年11月19日ホテル・ルックス到着の「夜大庭氏と野坂〔鉄〕氏に会った。田口君と吉原君がイルクーツクに居ること，富永某といふ社会主義者だと称する男が十日前に伯林に向って莫斯科を立ったこと，久保田は軍事探偵の疑いを受けてイルクーツクに六十日入獄していたが，二三日前にモスクワに着いたことなど大庭氏から聞くことが出来た。」

ロシアを追われるように出て，ひと月かけてベルリンに着いた富永は，逆方向からベルリンに着き，ロシアへ向かおうとしていた片山と12月初め（8日と記されているのは誤り〔前稿第5章参照〕）

会見し、その会見記は半年後にロシア風筆名で公表されることになる（富永カンデンスキー「独都に於ける片山潜氏」『改造』4巻5号，1922年5月，210；汗出ぬ助「片山氏に叱られ記（退露日記の一節）」同上，4巻9号，1922年9月，46-53）。が、ロシアでの自らの行動については具体的に記されていない。

次に、「シベリアゴロ」とも表記されていた久保田栄吉については、つとに鈴木茂三郎による曖昧なプロフィールが出ているが（鈴木茂三郎『労農露西亜の国賓として』（日本評論社，1923），189-193），本名は寺田二三郎であり，1909年「旭川第七師団附大尉松本誠一カ特命ヲ帯ヒテ入露スルニ当リ……随行スルコト、ナリ其際久保田栄吉名義ノ旅券ヲ交付セラレ入露シタル以来同氏名ヲ用ヒ居レリ」とのことで、最初から密偵の影がつきまとう（太田政弘警視総監の若槻礼次郎内務大臣，幣原喜重郎外務大臣ほか宛1925年11月21日付機密文書，外交史料館，4.3.2.1-1（17））。1921年1月「従前知合ヒ居リタル『ポポフ』[エス・エル党出身]ヲ便り浦塩ニ趣キタルカ余[久保田]ハ稍露語ニ通スルヲ以テ同人ノ斡旋ニ依リ在莫斯科共産大学日本語教授トシテヶ月五百円ノ給料ヲ受クルコト、ナリ同人ト共ニ同年五月『チタ』經由莫斯科ニ入ラムトシタルカ同地ニテ倉重特務機関大尉ノ紹介ニ依リ大庭柯公并富永宗四郎ノ兩人ニ初メテ面接シタル。「尚余ハ共産党ニ共鳴セサル為遂ニ大庭ノ為ニ密告セラレ日本軍事探偵容疑者トシテ同地ニテ拘禁セラレ……」以来1923年「八月迄莫斯科浦塩間前後一七箇所ノ監獄ニ転々移送拘禁セラレタリ殆ト満ニケ年間獄舎生活ノミ継続シタル」とのことである（阿部広島県知事の内田外務大臣ほか宛1923年8月20日付機密文書，外交史料館，4.3.2.1-1（15））。

ここにも、大庭の誤解されかねない行動の証言がある（Cf. 田口運蔵「革命ロシアに於ける大庭事件の経路」『解放』4巻2号，1925年11月，112）。ちなみに、大庭の1922年4月下旬の投獄は、久保田には「米国ヨリ片山一派ガ入露スルニ至リ大庭派ト片山派トノ軋轢ニ依リ片山派ノ中傷ヲ受ケ」てのものと捉えられた（白男川福井県知事の水野内務大臣，内田外務大臣ほか宛1923年8月11日付機密文書，前掲）。

上掲野中の文中にあった野坂について付記しておくとして、同じく入露直後に“Shima Hebotaro”[間庭末吉]が執筆した「僕の露西亜行き」によれば、野坂は1921年11月9日ドイツよりモスクワへ来、再び12月29日ドイツに向けて発ち、1922年1月4日にベルリン着き、そして帰朝の途についてた（РГАСПИ，495/127/26/38）。

小玉調書によれば、在露中、野坂はプロフィンテルンのロゾフスキーらと「会見シ意見ノ交換ヲ為」し、また「友愛会及日本労働組合ノ事ヲ書ク、其ヲ英文及露文ニテ後赤色労働組合カラ発行ス」とあるが（荻野編，第6巻，160），その露訳本が『日本労働運動概略』である（Т. Носака，*Краткий очерк Профессионального движения в Японии*（Москва：Международный Совет Революционных Профессиональных Производственных Союзов，1921），47 стр.）。英語版は未見だが，*A Brief review of the Labour movement in Japan*であろう（Cf. *Народы Дальнего Востока*，No.4，432）。

帰国に先立って1922年1月6日に“Cfphil, Lmqbgb” [= “Berlin, Nosaka”] から片山へ、次のような書簡が送られた（РГАСПИ，521/1/77/3-4）。「注意すべきは、予想以上に、政府は日本共産主義運動の内情を知り居る模様にて、殊に、ポスター事件[いわゆる「暁民共産党」事件]などに

についても、活動前に党員の捕縛ありし如きは、明に、党内にスパイのひそめることを証し候。今後は、余程の注意を要すること、存候。極東民族大会のことなども、恐らく、日本政府へはツ、抜げに知る、覚悟あって然るべきと存候。」「次に、小生の今後の地位に関し、XSBIGBI [=YUAIKAI (友愛会)] 会長より一通、セクレタリーより三通の書状あり、小生婦朝の暁には、同会調査部主任、労働学校講師、雑誌編輯者等の役目を仰付けられ、ともかくも、同会内に公の地位を得ることに決定いたし候。勿論、是等の職は表面のものにて、小生自身は組合内部に食ひ入り、オルガナイザー、及びアヂテーターの職に就くつもりに御座候。」そして最後近くに、「今後、小生は L.M. Newman なる外国人の仮名を用ふることこれあり候」とある。

その他のスパイ容疑に関しては、同時期、茂木久平関係文書があり、以下全文を紹介する (PG ACPH, 521/1/67/1; cf. 小玉調書, 荻野編, 第6巻, 161-162)。「茂木久平／右はイルクック同志の諒解により、最近入露の許可を得て、莫斯科に向ひたる筈なるが、同人は明らかに其の筋の密偵にして、西比利亞及び莫斯科に於ける日本同志の動静報告の任務を帯びたるものと認む。仍って適當の方法を講ぜられんことを希望す。／一九二一年十月七日」。

そのあとに署名 (K.M./General Secretary of Provisional E.C. of C.P.J.) が続いた。この英語版 (PG ACPH, 521/1/67/2, cf. 495/18/66/161) には、注があつて、「我々、同志たちは、ここで手紙の筆跡が同志 K. ヤマカワのそれであると認める」とあり、また「山川ハ松田ト変名シテ」いたとの小玉聴取書 (1925年10月14日; 廣畑研二編『一九二〇年代社会運動関係警察資料』(不二出版, 2003), リール1, 資料番号113) もあるので、“K.M.” は山川均である。さらに、片山自身の署名のある以下の添書もある。「上述の茂木久平は、数年間わが社会主義運動と関係があつた。がしかし、高島の方へ発つた。……茂木が反動的な男であり、いかなる眞の同志もかつて彼と交際していなかつたことは、よく知られている。」

外務省文書によれば、茂木は「通訳トシテ朝鮮人金洛俊ナル者ヲ雇入レ」1921年7月25日に「東京出發敦賀ヨリ乗船、浦塩斯德ニ渡航シ約二週間滞在同地ニ於テ更ニ朝鮮人二名ヲ雇入レ一行四名ニテ」9月1日ハルビンに來り、当地の特務機関と「數回ニ亘リ会见シタルヲ以テ視察中ノ処当地過激派本部ヨリ四方行旅行ニ関スル証明ヲ得タル由ニテ」9月6日「満州里行列車ニテ当地ヲ出發シタル模様」であつた (在哈爾賓総領事代理丸田篤孝の内田外務大臣宛1921年9月7日付文書, 外交史料館, 4.3.2.1-1 (13))。また別の官憲文書によれば、「茂木久平外一名」は9月下旬頃チタに來ていて (岸本関東庁警保局長の警保局長, 外務次官ほか宛1921年12月16日付文書, 同上), さらに小玉調書につなげれば、茂木はイルクーツクに赴く途中のチタで日本に向かう吉原と入れ違い、吉原は極東書記局長に自分が戻るまで茂木を帰さぬよう打電したが、茂木の方はイルクーツクで「極東 [書記] 局秘書ウォ [イ] チンスキーニ会テ色々ホラヲ吹タノデ秘書ハスツカリ信用シ、田口ニハ君ノ処ニ働カセルト云テオキナガラ、其後 [極東] 民族大会ノ代表ヲ連レテ來イトノ指令デ二万^マルブール (代表二名ノ旅費) [後述] ヲアタエテ茂木ヲ内地ニ派遣シタ」とある (荻野編, 第6巻, 161-162)。このあたりの情報が日本とさらにメキシコの片山のもとに届き、上記の警告文が短期間のうちに書かれたものと推定される。

茂木のスパイ容疑は、極東諸民族大会への日本派遣団にも対処を迫つた。日本共産党代表 (水谷健一 [徳田球一], 梅田良三 [高瀬清]) は長文の報告書を提出し、茂木の入露の知らせに驚き、在

上海のニコリスクーへ抗議文を送ったことを記した上で、以下のように説明した（РГАСПИ，495/154/175/121-125）。数年前から茂木のグループはあらゆる社会主義グループと労働運動から孤立しており、彼は上海とウラジヴォストークの間で朝鮮人民族主義者らとともにスパイ活動を始め、彼の全費用は資本家でもある政治家によって援助され、そして彼は高島グループの一生徒である、などと。その中でまた、茂木が1921年5月に第3インタナショナルへ行くための信任状を求めて同志堺へ数度電報を送っていたことが明らかにされた。他方、「日本人プロレタリアートの代表」（和田軌一郎，小林進次郎，吉田一，北村栄以智）は、茂木と彼のビジネスについて革命裁判の開催を求める決議をした（РГАСПИ，495/154/175/126）。

茂木ひとりの訪露に対する反応としては、大げさすぎるようにもみえるが、上記小玉調書にあるように、背景として実際に極東書記局が茂木に資金を提供した節がある。目下のところコミンテルン文書にはその形跡は見当たらないが、案内人兼通訳を務めた金洛俊に対する治安維持法違反の刑事訴訟記録（1931年）の中にその証言がある。

すなわち、茂木の聴取書によれば、イルクーツクでシュミヤツキーに「会ヒモスコーニ行クニ付イテノ便宜ヲ取計ツテ貰フ事ヲ頼」んだところ、試験をされ、「問題ハ日本ニ於ケル農民，兵士，都会ノ工場労働者，サラリーマンノ現在ニ於ケル思想傾向ト其将来ノ推移及之等ニ対スル運動ノ具体的方針等テアリマシテ」英文論文〔約50枚〕を提出した。「其ノ試験ニパスシタ」ようで、交渉を経て、シュミヤツキーが「一旦日本ニ帰り〔東洋革命的民族会議ノ〕代表ヲ三十人位迄ノ程度テ連レテ来イト申シ其旅費トシテ邦貨ニシテ一万五千円ノ現金ヲ呉レマシタ」。帰国した茂木は、「代表トシテ同志カラ五六名物色シ確カ同〔1921〕年十月中ニ相当ノ旅費ヲ持タセテ出発サセタノテアリマスカ驚イタ事ニハ其連中ハ精々ハルピン迄行ツタ者カアツタ丈ケテ皆行カスニ金ヲ然ル可ク使ツテ仕舞ツテ目的ヲ達シナカツタノテアリマス」（金俊燁・金昌順編『韓国共産主義運動史〈資料篇 I〉』（ソウル：高麗大学校出版部，1979），87〔本資料集は水野直樹氏より提供を受けた〕）。

これに対して、金の訊問調書では、茂木はヴォイチンスキーからであるが確かに米貨で同額を受け取ったとあるものの、それを代表派遣工作には使わず、遊興に費消し、さらに日本官憲のスパイであったと主張した（同上，9，51-52；金の活動歴については、以下を参照。木村誠ほか編『朝鮮人物事典』（大和書房，1995），220〔本書についての教示も水野氏より得た〕）。

一挙には費消しがたい大金のように思えるが、万一代表派遣工作が試みられたとするならば、それは上述の張太雷訪日による同じく代表派遣工作と時を同じくしていたことになる。

最後に、密偵容疑者ではないが、シベリアで吉原の下で働いた日本人藤井次郎（Jiro-Fujii）の文書を紹介する。それは1921年12月13日にИККИ幹部会の同志たちへ宛てて出された請願書であり、その中に自らのプロフィールが描かれた（РГАСПИ，495/127/6/17-18）。一部を紹介すると、藤井は同年4月に吉原と会い、ハルビンで働く約束で加わったが、諸般の事情でロシアに行き、後継者が見つからないため拘束され続けていた。その間、彼は8カ月の学習期間に田口の講義で共産主義を学ぶ一方で、体を害するとともに、共産主義学生としての期待には応えられない、と思うようになった。そして、モスクワへ赴いた吉原からの返事を待たず藤井は、老いた父親の面倒を理由に帰国の本請願書を出した。帰国の口実と明らかに読みとれるのだが、次のようにも記されていた。もしもあなたがたが日本共産党のためにある指示を携行することを求めるならば、私は最高にしあわ

せな少年となるであろう、と。

印刷職工藤井の仕事としては、『チタ』『イルクック』浦塩ニテ宣伝文書ニ関シテ一九二〇ヨリ一九二四年概略」(荻野編, 第6巻, 196-202)によれば, 以下の5点がある。

- 1) 吉原源太郎「軍人ノ心得」イルクック, 1921年6, 7月頃作製 [日付は調査員の判断であつて, 要確認。以下, 同様], 12頁位, 5百部位 (「陸軍省」カ「参謀本部」ト [偽装して] 書テアル小形ノ「パンフレト」)
- 2) 吉原源太郎「新 [進?] 軍令」イルクック, 1921年6, 7月頃印刷, 8頁, 3百部位 (陸軍軍令部)
- 3) 第三国際共産党極東局秘書ウォエテンスキー [ヴォイチンスキー], 無題, イルクック市極東局宣伝課, 1921年9月作製, 3千部位 (極東民族大会代表召集ノ檄文)
- 4) 第三国際共産党中央執行委員会「ワシ [ン] トン太平洋会議ノセ^マセツ」イルクック極東局宣伝課, 1921年9月末作製, 8頁, 3, 4百部
- 5) 第三国際共産党中央執行委員会「日本支那朝鮮労働者諸君へ」イルクック極東部^マ宣伝課, 1921年9月末印刷, 8頁, 5百部 (?)

小玉調書によれば, 前二者は吉原がコミンテルン第3回大会出席のためモスクワへ赴く前に脱稿したとある。後三者は, 極東局日本人部主任となった田口が当地で英文から和訳し, そして藤井の仕事として上記のほか1点, すなわち「ワシントン会議ニ対シテ極東民族ニ与ル」が加えられている。同じく同調書によれば, 藤井は「極東部ニ帰国ヲ願タ [上記] 処本部デハヨク働テクレタノコトデ [極東] 民族大会ニマデ代表トシテ待遇シ『モスコ』ヲ見物サセ帰スコトニ成タ帰国後ハ内地デ實際運動ニ参加スルト云フ, 約束デア」り, 1922年3月帰国の途についたとあるが(荻野編, 第6巻, 155, 157-160), 確認が要る。

また, 小玉の最初の聴取書によれば, 藤井に加えて吉村(吉原の甥とのこと)による印刷の仕事に小玉自身が1921年11月頃協力していた。小玉は同年8月末モンゴルにて軍事探偵の嫌疑でロシア兵に逮捕され, 取調べのあと, イルクーツクの「極東部」[極東書記局]へ送られ, 田口を介してヴォイチンスキー, C.И. スレバク [情報部長]と会い, そして極東諸民族大会のための代表とともにモスクワへ赴くまでの間のその協力であった(廣畑編, 資料番号113)。田口の回想によって補えば, 小玉調書を読んだ田口は, 「私の助手として働く日本人が一人欲しいと思つてゐた際だったので」ヴォイチンスキーにチタの監獄にいた小玉の「貰ひ下げ」を依頼し, 第3回革命紀年日当日にやって来た小玉と会見し, 「同郷人であるといふセンチメンタルな心持に強く惹かれ, 「身柄を引き取つ」た(田口運蔵「シベリア国境挿話」『改造』14巻3号, 1932年3月, 16-17)。

藤井と小玉は, 田口の手配によって彼と一緒に1922年元旦, 特別列車でモスクワへ向けてイルクーツクを発ち, ともに日本労働者の資格で審議権を与えられて極東諸民族大会に出席することになる(РГАСПИ, 495/154/167/34, 495/154/167/43; cf. 廣畑編, 資料番号113; ユーリー・ゲオルギエフ「片山潜と第1回極東勤労者大会」『今日のソ連邦』5号, 1979年3月1日, 21)。

思想もしくは運動への共鳴者とは必ずしも言えない在露日本人でさえ運動に関わっていたのが, 日本共産党暫定「創立」(「おわりに」へ続く)直後の状況であった。

おわりに

大杉が上海から持ち帰った資金をもとに1921年1月に再刊した『労働運動』の巻頭の辞は、こうだった。『日本は今、シベリアから、朝鮮から、支那から、刻一刻分裂を迫られてゐる。／僕等は今もうぼんやりしてる事は出来ない。いつでも起つ準備がなければならない。／週刊『労働運動』は此の準備の為に生れる。』／此のはがきを受取つた読者諸君の多くは、必ず、其の文句のあまりに唐突なのに驚いたに違ひない。けれども、実際に、日本の運命はもう眼の前に迫つてゐるのだ』（『日本の運命』『労働運動』1号，1921年1月29日，1）。

この文章に対して山泉は、（前半は割愛するが）「世界は動いている。動いている世界のなかで体感した、この自分たちの流動感を『労働運動』のなかで大杉はなんとしても表現したかったのである」と捉えた（山泉，111）。それを私なりに言い換えると、本稿で捉えようとしてきた「東回り」のインタナショナルな運動を大杉が上海で体感した表現で、それはないだろうか。

もう一つ、日本共産党準備委員会〔暫定中央執行委員会〕についての犬丸義一の総括を引用しよう（犬丸義一『第一次共産党史 増補 日本共産党の創立』（青木書店，1993），391-392）。「二一年春の組織は、真に非合法の組織活動を国内で展開できる組織でなく、単にコミンテルンとの関係的連合・結合という点に歴史的意義がある、といえよう。……この過程には、コミンテルンとの関係で、共産党が組織されていくという、時代制約性があることは明白であろう。」

犬丸のいう「時代制約性」こそ、「インタナショナル」の文脈で私は重視したい。第一次世界大戦勃発を経てロシア革命を起爆剤とした国際的な社会主義運動の昂揚こそが各国共産主義諸党創設の歴史的背景であったのであり、それなくしての「自力」創設はありえなかつたであろう、たとえその評価が分かれようとも。E. ホブズボームが指摘したように、共産主義はどこでも二つの起源、すなわち民族的経験とロシア革命をもっていた（Cf. 山内昭人『リウトヘルスとインタナショナル史研究——片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウイング——』（ミネルヴァ書房，1996），247）。日本共産党創立にとっても、その暫定中央執行委員会（準備委員会ではない！）設立前夜からのインタナショナルな運動の展開を軽視して「国内」にのみ軸足を置いて捉えるのでは不十分であろう。運動の当事者たちは、在米在墨の片山らであれ、在露の吉原、田口であれ、そして日本の近藤らであれ、日本共産党暫定中央執行委員会設立を日本共産党「創立」と受けとめたのである、間もなくそれがコミンテルン中央の審査に耐えられなくなるとしても。

前稿と本稿でもって、創設されたばかりのコミンテルンとその下部ないし関連組織による日本社会主義運動との接触、さらには日本共産党創設、極東諸民族大会代表派遣などの試みを、モスクワを起点に「西回り」と「東回り」とから「点と線」ながら全体として結んだことになる。あとは、その社会主義インタナショナルの実体を「面」に広げていく作業が残っている。

〔付記〕 本稿は2002～2004年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）による研究成果の一部である。

ルガスビで注文したマイクロフィルムの後日入手については、いつもながらイリナ・ノヴィチェンコ（Ирина Новиченко）さんの協力を得、今回は特別に富田武氏の協力も得た。記して兩人に謝意を表する。
（やまのうち・あきと 九州大学大学院人文科学研究院教授）